

令和7年度 第4回学校運営協議会 報告

1 日 時 令和8年1月29日(木) 午前9時30分から11時30分まで

2 会 場 本校 会議室

3 出席者等

(1) 学校運営協議会委員 (※欠席者)

【委員①】元特別支援学校長 (地域コーディネーター)

【委員②】中村町自治会長

※【委員③】本校PTA会長

【委員④】あおい中村町

【委員⑤】ありんこの里副管理者

【委員⑥】大里生涯学習センター長

【委員⑦】小糸製作所人事部企画課

(2) 校内教職員

校長、副校長、事務長、各学部主事、地域支援部長、教務・情報課長

4 会議次第

(1) 開会

(2) 校長挨拶

(3) 協議等

(4) 閉会

5 協議等内容

(1) 校長挨拶

- ・インフルエンザ等感染症の影響により本校でも欠席する児童生徒がいた。先日、小学部6年生の中学部体験が終わった。中学部の進路は現在、2名が決まり、これから受験を控えている生徒もいる。幼稚部、小学部の体験や説明会が予定されており、来年度に向けて動き始めている。
- ・次期学習指導要領の検討が始まり、AI時代に対応する資質能力の育成や各校の特色に合わせた柔軟な教育課程の編成、「情報科」の新設等の議論がされている。また、特別支援学校の「自立活動」の視点が通常の小中学校の学習指導要領にも明記される方向性などから、全ての教員が障害の理解を深めて、子どもたちの支援に取り組むことが求められているといえる。本校のような特別支援学校は地域の学校や教員を支えるためのセンター的機能としての役割がより一層期待されている。
- ・人工内耳の医療の進歩により、聴覚を活用するプログラムが静岡県で始まり、手話施策推進法に基づく手話の理解と活用についても学校に求められている。この状況を踏まえ、子どもたちの実態に合わせて教員の専門性を向上させながら指導していくこと。学校現場では、「働き方改革」として、短時間で効率を上げ、子どもと向き合う時間を確保する取組も進めている。

(2) 協議等

ア 令和7年度の学校の取組について (学年末学校評価アンケート結果)

(ア) 校長から

- ・全体的に「3（できた）」（棒グラフ）の評価が増えた。特に、項目⑤「ICTを活用した学びが『分かる』、『楽しい』と感じている子」、⑦「『人との会話が楽しい』と答える子」という項目で子どもたち自身が自分の成長を実感している。①「互いの良さに気づき、自分も友達も大事にしながら学校生活を送ることができる子」、⑧「交流の学習の経験で、いろいろなことを学べるのが楽しい」の項目も評価が上がり、子どもたちが人との関わりを肯定的に捉える姿が見られた。
 - ・⑥「自分で問いを見つける学びが楽しい」という項目では、評価は低く、子ども自身ももっと伸びしろがあると感じている。教員の授業改善、工夫が今後の課題である。
- 【項目ごとの評価】（教員評価も含めた成果と課題について）※①～⑫は項目番号
- ・①の成果は、帰りの会での「友達の良いところ探し」やストレングスカード等の活動が定着し、互いを認め合う姿勢が育ったこと。課題として、自己肯定感が低い子どもたちへのアプローチの工夫が必要である。
 - ・②の成果は、実際に訓練をすることで子どもたちも避難するための行動が身に付き、火災、地震、防犯、水害等に応じた訓練により、防災意識が向上したこと。課題として、訓練のマンネリ化防止と、多様な場面設定による訓練の実施が必要である。
 - ・③の成果は、スポーツデイ（ボッチャ大会等）を通して友達と関わり合いながら活動することを楽しみにすることができるようになったこと。幼稚部の遊び、小学部のおはようタイムの取組、学部を超えた交流と運動習慣が形成されたので、体を動かすことを楽しむ習慣の継続的な定着を図りたい。
 - ・④の成果は、ストレングスカードを活用して自分の心と向き合う活動を教員やスクールカウンセラーと一緒にやり、自己理解が深まったこと。課題として、本校の子どもたちは障害認識も必要であり、自己理解に対して家庭とも連携した支援が必要である。
 - ・⑤の成果は、ICTの活用場面を増やし、写真検索や学習の中でのアプリの活用等、良さを活かした実践が進められたこと。中学部ではタブレット端末の持ち帰りをして、文房具のように使いこなす様子が見られた。課題として、教員間の活用能力の差があるため、研修を行い、知識を身に付けて使い慣れるようにしていきたい。
 - ・⑥の成果は、学部で研修テーマをもって、授業に取り組み、各学部で講師を招聘し、授業の振り返りやアドバイスをもらって授業に活かしたり、学習発表会や総合的な学習の時間の学習では、自らが問いをもち、調べる姿が見られたりしたこと。課題として、教員の授業力を高めるために、教員間の授業参観の機会の確保、調整の難しさが挙げられた。
 - ・⑦の成果は、幼稚部からの絵日記の取組や教員と子どもたちの会話で、子どもたちが「分かってもらえた」と感じ、子どもの伝えたい気持ちが向上し、人と関わることが楽しいと感じられるようになってきたこと。課題として、教員が「自立活動のめやす」を活用した、言葉を引き出す指導力を高めていきたい。
 - ・⑧の成果は、居住地校交流の増加により、自分の将来像を描きながら、交流に目標をもって取り組み、発達段階に応じた友達同士のかかわりを楽しみ慣れてきたこと。課題として、目標設定と振り返りの機会の設定、子どものニーズに合わせた活動の設定や相手校との日程調整の体制整備をしていきたい。
 - ・⑨の成果は、静岡県では事務が学校教育に参画していく方向で現在、動いており、本校がモデル校となっているため、事務職員が今まで教員が行っていた会計業務を担うことで、教員が子どもたちと向き合う時間が増加したこと。事務とのさらなる連携強化により、教員の子どもの向き合う時間を増やし、教育力を向上させていきたい。
 - ・⑩の成果は、外部施設への巡回やコーディネーターとの連携で、保護者のニーズに沿った手厚い支援が実現したこと。課題としては、校内での情報共有と、本校の取組の積極的な情報発信をしていきたい。

- ・⑪の成果は、通級教室において、通級生が自分の聞こえの特徴について学び、在籍校での学校生活が充実できている。課題としては、通級生の増加に伴う、少人数の教員での対応の体制の検討が必要である。
- ・⑫の成果は、沼津聴覚特別支援学校、浜松聴覚特別支援学校とデフリンピックの学習について共有したり、教員の研修を行ったりしたこと。令和10年に静岡県で行われる全国研究大会に向けて3校の実践を共有し、3校連携による組織力の向上が必要である。

(イ) 学校経営計画の主な取組と評価【各学部から】

- ・幼稚部：他学部の遊びに参加し、それぞれの発達段階での子どもたちの関わりから様々な子どものあらわれが見られた。また、ふれあい中村町サロンの交流では、木の葉や木の実で作ったリースを渡したり、ボーリングの対戦をしてお互いに声を掛け合ったりして交流ができた。このように中村町のふれあいサロン、なかはら幼稚園、他学部の児童生徒との交流を通して挨拶をしたり、自分から関わったりすることができた。
- ・小学部：朝の活動でも持久走の練習を行い、当日は練習の成果もあり、記録も伸びて達成感を感じた。また、5、6年生が中村町の「よんもくカフェ」でデフリンピックの紹介を通して交流も行った。クラブ活動では、IAIの会社の方からプログラミングを教わり、その活動で自ら問いをもち、失敗してもまた自分で考えて取り組む姿が見られた。
- ・中学部：将来の自立に向けて関心や意欲をもつことを目的として、NEXCO中日本の若手社員との交流を通して、社会に出て働くことの意義を生徒が自分なりに考えグループに分かれて話し合った。生徒からは「社員の方から教えてもらったことを自分の将来を考えるとときに活かしたい。」「お金を稼ぐためには勉強が必要だとアドバイスされた。」等の感想があった。中村町との交流会では、相手に分かりやすく自分の思いを伝えることを意識し、ボッチャや手話クイズに挑戦し、楽しく活動ができた。中学部卒業後、将来の社会参画に向けて、少しずつ生徒が身に付けたい力やなりたい自分になるために何が必要か考え、来年度も引き続き交流活動を続けていく。
- ・地域支援部：乳幼児教室では、保護者が前向きに子育てができるように、行事を扱った学習を行っている。クリスマスの学習では体験的な学習を通して、子どもの気持ちを保護者が代弁したり、保護者が言う言葉を子どもが真似したりなどの様子が見られた。保護者学習会では、幼稚部の保護者との座談会を行い、日頃の悩みを相談したり、保護者自身が日頃の頑張りを認めたりする機会になった。振り返りシートを作り、保護者が子どもと何を楽しみたいのか、意識して使いたい言葉等を確認しながら、授業で実施し、家庭ともつなげた。通級指導では、本人や保護者の気持ちに寄り添いながら在籍校と連携して指導を行った。通級指導のアンケートでも22人の児童生徒が「学校生活や学習に自信をもって意欲的に参加できた」と回答している。

(ウ) 委員からの質問、感想等

- ・通級指導教室の学校数、訪問について教えてほしい。【委員①】
- ・(地域支援部) 学校数は29校、32名の児童生徒で1人年2回訪問をしている。乳幼児教室は6名在籍し、年1回訪問している。教育相談は適宜訪問している。

[項目①について]

- ・お互いの良さを共有することが大事である。自分が短所だと思うことも他者からは短所にならないこともあり、相手の意見を受け止める力が必要である。【委員④】
- ・高学年から中学生は反抗期もあり、素直な気持ちを出せず、自己肯定感が低くることがある。反抗期がないと社会と上手に関わりにくい印象がある。【委員①】
- ・(中学部) 中学生は思春期に入り、小学生の時と比べて、素直に受け入れられない場面もある。生徒自身が伝えたいときや話したくない時などがある。学部内の情報共有と居場所作りが必要である。

- ・自分自身も10代の時に他者と比べて劣等感があつた。交流で自分の得意なところを評価してもらうことで、自信につながる。【委員②】

[項目②について]

- ・防災は地域とのつながりが大事だが、どのように防災教育を行っているか。【委員①】
- ・大里生涯学習センターでも職員で訓練を行っている。同じ訓練でも繰り返しやることは大事である。実際に地震のときに使う機器を使用したり、防災教育を丁寧に行ったりしてきたい。【委員⑥】
- ・ありんこの里では、春と秋で年2回訓練を実施している。7月の津波警報発令時に実際に利用者と避難した。普段は気候の良い時期に行っていたので、暑さで歩いて避難することが大変だった。実際に地震が起きたときを想定して、暑い時期や寒い時期の避難の仕方や歩行が難しい高齢者の移動をどうするかなど、具体的な方法を考える機会になった。【委員⑤】
- ・(校長) 7月の津波警報発令時に本校にも避難してくる方がいた。実際に大きな被害はなかったが、実際のシミュレーションを考えた訓練が必要である。
- ・防災訓練は年1回実施している。職場での機械による事故もあるので、安全環境を担当している部署が巡回している。7月の津波警報発令時に公共交通機関が止まり、帰宅できない人が出た。夕方には帰宅できたが、公共交通機関を利用している方の対応も考える必要がある。広域通学者の通学時の安否確認も必要なのではないか。【委員⑦】
- ・東日本大震災の時に本校に勤めていた。公共交通機関が動いているのか、保護者は迎えに来られるのか、職員の帰宅等、様々な状況を考えた。職員が危機感をもって訓練をする必要がある。【委員①】
- ・静岡県は防災意識が高いと感じる。ホテルや区役所等、見えるところにヘルメットが置かれている。また、実際に発災したときに周りから支援を受けやすい地域でもある。【委員⑦】
- ・(校長) 本校が避難所となる際の職員の対応の可視化、地域連携による「命を守る教育」が重要である。

[項目③、④、⑥、⑦について]

- ・地域との交流の取り組みで自分の内面を理解して、相手も自分と同じだと気付いたり、さらに自分を良くしていきたいと思えたりする。【委員②】
- ・スポーツデイのように誰かと一緒に体を動かすことで楽しさを感じたり、知らないスポーツを知る機会にもなったりする。【委員④】
- ・項目④は前期に比べて「1」の評価が増え、項目⑥の「1」の評価が前期と同じくらいだった。ストレングスカードの取り組みは良いが、相手のカードも見ることができるのか。【委員⑥】
- ・(幼稚部、中学部) スtrenグスカードは長所の言葉と絵が書かれているワークシートを使い、自分の強みを選ぶだけでなく、友達にも自分の良いところを選んでもらうことで、自分では気付かない、自分の良さを知ることができる。
- ・項目の④と項目⑥が教職員の評価と児童生徒保護者の評価に差があり課題であるが、先生方がお互いの授業を見ることが難しいのが分かる。【委員⑥】
- ・(小学部) 教員が子どもと具体的な授業場面で振り返りしたことで、小学部としては項目⑥については達成できたと子どもたちは感じられた。
- ・(中学部) 項目⑥では「自分で問いを見つける」という捉え方が抽象的で、具体的にどの場面なのかを振り返るのは難しかった。授業や授業以外の場面では、分かって楽しかったと感じたり、自分から進んで取り組んだりしていて、達成できていた。
- ・(校長) 自分の成長の中でどう変わったかを評価できるような工夫が必要である。学校評価をするときだけでなく、日頃から学校評価について学校生活の場面で定義していく必要がある。

- ・幼稚部から小学部の時期に自分の体の使い方を知ることが大事だと感じた。子どもが何気なくやっている体の動きを授業に取り入れ、幼稚部から小学部へとつなげる。項目③については、学齢期は障害を認識する時期でもあるため、障害をマイナスと捉えず、ICTを活用して、障害を強みに変えていく。【委員⑤】
- ・自立に向けて同級生だけでなく、幼稚部から中学部での交流もさらに充実させる。社会に出てから様々な世代とかかわるので、意識してできると自立の促進になる。【委員⑦】
- ・（校長）学校を卒業した後、様々な人をつながりをもてるように、家庭とも連携し、人との関わりをもてるような素地を本校で築いくこと。

[項目⑤について]

- ・手話言語条例が出て、市や県で手話を言語として進めている。公共機関での遠隔通訳サービスが普及された。【委員⑤】
- ・（校長）本校は中学部までしかないので、社会に出てからの視点に乏しい。学校が情報の集まる場所とつながり、保護者、子どもと共有していくこと。

[項目⑧、項目⑩]

- ・今年度は昨年度より交流ができた。中学生との交流で、高齢者の10代の頃の話ができたなら役に立ったかもしれない。【委員②】
- ・1月25日に大里カルタ大会を行い、大里西小に通う耳が聞こえにくい児童が参加し、講師に補聴機器の使用を依頼し、活用して行った。通級指導教室や学校外への支援と先生方の負担が大きいと感じる。【委員⑥】
- ・社内からデフリンピックに2人出場し、聴覚障害の理解や関心が高まった。様々な課題に行政とも連携して、先生方が子どもたちと向き合う時間ができたら良い。【委員⑦】

イ 令和8年度の学校の取り組みについて【校長から】

- ・来年度の掲げる姿は6項目で整理し、子どもの具体的な姿を目標として保護者、地域と共有し、支援する。
- ・発達段階に合わせて具体的な姿を示し、学校での重点をもとに保護者にも子どもの願う姿を考えてもらい、一緒に子どもを成長させる。
- ・センター的機能の充実で、通級生、相談性への支援を強化する。
- ・来年度の学校の具体的な取組は学部、担当部署で協議し、来年度の第一回の運営協議会にて報告する。
- ・子どもを中心に横、縦につながり、地域、家庭、福祉、医療、行政と社会全体で子どもを育てる体制を構築する。

3 学校応援活動

- ・各学部から子どもたちに向けた励ましの言葉をカードに書いていただいた。